探訪 北の風景 91

縄文遺跡 入江・高砂貝塚

胆振管内洞爺湖町

青木和弘

洞爺湖温泉は有珠山や噴火災害遺構、昭和新山など見どころが豊富で、来訪者が特に多い人気観光地である。２００８年にＧ８（主要国首脳会議）が開かれ、その景観が世界の注目を浴びた。翌年にユネスコの「洞爺湖有珠山ジオパーク」に認定されている。コロナ禍前の２０１８年度の洞爺湖町観光入り込客数は２５９万人で全道９位、町村では堂々の１位である。

それにまた、新たな魅力が加わった。同町にある「入江・高砂貝塚」が、本年（２０２１年）７月27日、「北海道・北東北縄文遺跡群」の一つとして、ユネスコの世界文化遺産に登録されたのである。

１万年を越える縄文時代は、戦闘に備える陣地や争いの痕跡のない時代で、世界でも、これだけ長く平和が続いた地域はないといわれている。

ただ、縄文遺跡を楽しく見学するには、多少の知識と想像力が必要かもしれない。近年は遺跡に残る骨などのＤＮＡ分析や、放射性炭素年代測定で多くのことが分かってきた。

20万年前にアフリカで誕生した現人類のホモサピエンスが日本やって来たのは３万８０００年より以前のこと。当時は最終氷河期（７万年前～１万年前）で、海水面が現在より80～１３０メートル低かった。ユーラシア大陸と北海道は、サハリン（樺太）経由で陸続きだ。シベリア南部からマンモスなどの大型動物を追って、石器作りの技術を持った人々がやって来たとみられている。

北海道・北東北縄文遺跡群の青森県の遺跡から、約１万６５００年前の土器が発見され、これが世界最古の土器とされる。土器があると煮炊きや貯蔵ができるので、食料の種類も量も大幅に増え、定住生活が可能になってくる。日本はそれから稲作農業が広まる（約３０００年前）までを縄文時代とし、次を弥生時代としている。

実は、最終氷河期が終わるのは約１万年前で、その後、急速に気候が温暖化し極地の氷が解けて海水面が上昇した。寒冷な草原は、温暖なクリやドングリの育つ広葉樹の森になり、大型動物は絶滅するが、シカやイノシシ、ノウサギなどの小動物が増えて、海では貝や海藻が豊富になった。

８０００～７０００年前に有珠山の大噴火で山体崩壊が発生し、それから自然環境が回復して海岸沿いに人が住み始めるのは５０００年ほど前からのようだ。入江貝塚は約３８００年前のもので標高20メートルほどにあり、海岸線がかなり高い位置にあった。定住生活が成熟する前期の遺跡で、貝塚からはアサリ、イガイなどの貝や、ニシン、カサゴ、マグロの骨、エゾシカやイルカなどの獣骨、釣り針や銛（もり）などの漁労に使う骨角器が発掘されていて、貝よりも獣骨や魚骨が多いのが特徴だという。貝塚に共同の墓地や祭礼場がある。

高砂貝塚は、入江より８００年ほど新しいもので標高は10メートルほど。入江貝塚から４５０メートルほど北西寄りにある縄文後期や晩期などの遺跡がある。気温が現代に近づき、海面が下がり、海岸線はいまの鉄道線路のあたりまで後退した。

高砂貝塚ではアサリや、カレイの骨が多いこと

入江貝塚の貝塚断面をトンネルで見学できる。入江貝塚は土が黒いのと、貝類よりも魚の骨や獣骨の割合が多いのが特徴。良質のたんぱく源に恵まれていたのだろう。（写真上と、左下の入江土器は洞爺湖町ＨＰより）

高砂貝塚のＣエリアの貝塚の場所。散策のできる公園になっていて、貝塚が埋まっている場所の上にホタテの真っ白な貝殻を敷き詰めている。３つの時代の異なるエリアがあるというが、ホタテの貝殻を敷き詰めた場所は２か所だけだった。

から、貝塚周辺に砂浜が発達し、一時的な寒冷化があったことが分かるという。内浦湾の豊かな魚介とクリやドングリなど広葉樹林の豊富な恵みに支えられた暮らしだった。墓地とは独立した祭礼場が出現するようになったという。

縄文時代の平和な時期、入江貝塚には竪穴式住居が10軒ほどあった。一軒に5、６人が住んだといわれる。漁労は舟と網を使って共同で行い、土器や装飾具は専門の工芸家がいて、人々は、おしゃれで高い文化レベルを持っていたのではないかと考えられるという。貝塚の埋葬域から出土した副葬品から高度な精神性による祭礼・儀礼が行われていたことが分かっている。自然の恵みと共存したエコロジーで争いのない暮らしから現代人が学ぶべきものが多いのではないだろうか。

入江・高砂貝塚館。南東３２０ｍに入江貝塚、北西１２０ｍに高砂貝塚があり、出土物が展示されている

入江土器は、木の棒で渦巻や波型の文様を描くのが特徴とされる。縄文後期の約４０００年前の土器